

親友

高野 桜

ここではメインサイトに載せられないほどしょうもない作品を書いてみます。親友がとても悩み、相談してきた時、どうしますか？ という妄想。[親友] 夕日の赤が川の水に溶け込み、周囲は黄金色に染まり始めていた。背の低い草が生い茂る川沿いの土手で、一人の男子生徒が腰を降ろしていた。あの紺のブレザーは、見紛うことのない、俺の通う高校の制服だ。気になった俺は、ゆっくりと彼に近づいていった。ちょっと小ぶりの背中はひ弱そうなイメージを与え、下に俯き、垂れ下がった黒の前髪。俺は思わず声を張り上げていた。「小林！」不意に声を掛けられ、俺に困惑の眼差しを向ける。小林に間違いなかった。「こんなところでどうしたんだ？」俺が声をかけると、小林は再び俯いてしまった。その姿からは生気が感じられず、悲壮感に満ちているようだった。俺は小林の横にどっかと腰を降ろした。「どうしたんだ？」小林は一瞬顔をあげるが、すぐさま視線を下に落とす。「僕——」そう、小林が呟いた。そして、必死に言葉を振り絞り、後を続ける。「死にたい——んだ」小林は言ったあと、膝をかかえ、ブルブルと震えだした。俺はそんな小林に向かい、勢いよく口を開いた。「だったら殺してやるぜ！」背後から小林の華奢な背中を思い切り蹴飛ばした。「ぐ、わわわああ、海瀬く——」小林は勢いのまま、土手の急な斜面を転がり落ちていく。川の手前でやっと止まった小林は、モゾモゾと砂利にはいつくばる。「死にてえんだろ」そういいながら、小林の腕を掴み引きずり起こすと、川へ向かって背中を蹴った。ばしゃーんと、いう派手な音と共に、水しぶきが舞い上がる。「助けて——泳げな——」俺は近くにあった流木の枝を手に取り、小林に向かって伸ばした。「さあ、捕まれ！」とは言ったものの、枝は水を吸っていた為か、とても重い。支えきれない——ぼこんと、派手な音をあげ、枝は小林の頭を叩いた。「海瀬——く——」水面にぶくぶくと泡を上げながら、小林の頭が沈んでいく。「ちい！」俺は舌打ちをすると、川に飛び込んだ。その瞬間、なにかものすごい力で体が川底に沈んでいく。なに！？頭をなにかで振伏せられる感覚。必死に振りほどき、水面へと上がる。水面から顔を出し、口に流れ込んだ水を吐き出す。瞬間、俺は我が目を疑った。「足、つくじゃねえか」振り返ると、水面から顔をだした小林が俺に向かってニコニコと微笑んでいた。「さっきの仕返し」いっぱい食わされたことを理解した俺は、小林の頭を掴み、水面にたたき付けた。飛沫が舞った。顔を上げた小林の笑顔はとびっきりだった。「ちっぽけなことでも悩んでいたのがバカらしいや」あははと笑ったあと、小林は言葉が続けた。「海瀬くん、ありがとう」「あ、ああ——」俺は戸惑いながらも、笑顔を向けた。いや、死にたいんだったら手助けしてやるつもりだったんだが——その言葉を深く胸の内にしまい込み、俺は新たな親友、小林の肩に腕を回した。すっかり太陽が姿を消した河原に、俺と小林の笑い声がつまでも、いつまでも響き渡っていた。おわり